

# 酪農育英会だより

2011年12月1日発行 2011年版 財団法人酪農育英会刊 ●題字／原田 勇

## 「創立者の想い」に心を向けて

財団法人酪農育英会理事長 原田 勇



昨年（2010）12月、「酪農育英会だより」を発行してから、早くも1ヵ年が過ぎようとしています。本会は元より、関係の酪農学園、同後援会、同連合同窓会、貴農同志会等の関係者に500通余の酪農育英会だよりを送りました。反応はぞくぞくという程ではないが、少しずつ反応があり、皆さん心して、この会の独自性と重要性をご認識頂いて下さっているようで心より感謝するものであります。

本育英会創立者の黒澤西蔵先生は、夫人むめ江さんのご同意のもと、昭和32（1957）年当時むめ江夫人の名で60万円（現在の時価推定1000万円以上）、西蔵名で土地2287坪（時価1143万円：坪5000円）、現時価で2億円以上の高額寄付申込みがあり、これを基本財産として本育英会が発足することになったと記されています。（註1「財団法人 酪農育英会設立書、設立50周年記念誌2007」による）

また、創立者黒澤西蔵先生の極く晩年の考え方は以下のようであります。「ごく一般的に健康と申せば、それは、肉体的健康を直感するでしょう。私はこの上に精神的健康、経済的健康が加わらなければ、人間として完全な健康は保持できないと思っています。これを健心、健身、健財といい三健論としてまとめています。その際もっとも重視すべきなのが「心」です。まず心の健康から始まり、ついで肉体的健康を保持し、そうして経済的健康にいたるのが順序であろうかと思うわけであります。」（註2「健士健民新論1974」）

今の時代一人の偉大な実力者、あるいは巨大な一企業によるご寄付やご好意によっては、その目的を達成することはなかなか困難であります。関係する、あるいは何らかの契機で開眼された志ある人々によって創立者が示して頂いた行動を、私たちは受けついで行かねばならない時であると教えられる者

であります。

私はこの頃、オバマアメリカ大統領が青年時代に体験したといわれるコミュニティー・オルガナイザーの仕事に興味をもつようになってきました。オバマ氏の米国シカゴにおいての約3年間のコミュニティー・オルガナイザーの体験が、後のオバマ大統領の誕生と結びついたという記事を読んで、私は、これを支えているアメリカ社会の底の深さを強く感じました。

紙数の都合で要約的に申し上げればコミュニティー・オルガナイザーとは「地域住民との信頼関係を築き、直面する問題に取り組むために人々を鼓舞し、時には権力側と交渉する力を結集させる役割」ということのようなのです。

しかし、これを紹介した著者は「米国社会にはそのような青年の内面的要請を受けとめる精神風土と社会的土壌が存在している」といっています。これは北欧の「社会的文化」と、また違った形の社会参加であると私は感じています。（註3「道新（夕刊）、2009.1.26」）

残念ながら日本には、この「力」がとても弱いと感じざるを得ない。本財団の創立者たちやこれまでのその協力者は極めて特異的な異質の、しかしこのような北欧や米国の社会的文化に触発された人々の萌芽の一つと思われ、教えられている者です。

今年の奨学生の中には東日本大震災の被災者（3名）も含まれており、またカザフスタン国（アジア圏）から初めて酪農大に留学された大学院生もおり、私はいよいよこの仕事の重要性和意義を痛感させられています。

酪農学園大、短大、とわの森三愛高校（旧機農高）を設立以来一貫して支援頂いている財団法人酪農学園後援会があることはご承知のことと存じます。この財団へのご寄付の中に「酪農育英会」と記載頂くと免税処置となり本会に入金されます。どうぞご支援をお願いします。

## 酪農育英会の心を伝える

酪農学園大学  
酪農学園大学短期大学部 学長

谷山 弘行



わが国において、どの分野であれ人材を育てる多くの教育機関では、そこで学ぶ学生（生徒）への経済的支援が何らかの形で行われている。その支援活動を行う団体あるいは組

織は「育英会」と言う名称を持っている。「何々育英会」という名の学生支援団体は数え切れないほどある。その活動は奨学金としての学資を給与あるいは貸与する形で運営されているのが一般的である。わが国で最大の組織が「日本学生支援機構」である。旧日本育英会を中心にいくつかの公的団体が合併した独立行政法人で、国の内外を問わずわが国で学ぶ学生への支援を行っている。近年、奨学金の返還に関わるトラブルが急増していると聞く。貸与奨学金については返還が義務付けられており、借りた奨学資金は次の奨学生のための資金として返還することが当然のことと思うが、最近ではどうもそうではないらしい。先日も返還をめぐる裁判がおこされた記事が新聞紙上に見られた。紙面の内容から、その背景には支援する側と支援を受ける側の奨学制度の認識に大きなずれがあるようである。制度そのものを十分に理解していない者が採用されていることや、卒業後の経済的困窮を理由にしている者が多いと聞く。しかし、はじめから奨学資金の返還の意思のない者もいると聞くから驚く。

ところで育英とはどういう事であろうか。多くの支援団体が「育英」と言う名称を使用している。広辞苑をひもとくと、「英才を教育すること、学徒に学資を給与または貸与し人材を育成すること」とある。また、孟子に「天下の英才を得て、之を教育するは三樂也」とある。人材を育て上げる支援として古くから運営されてきたもので、優れた人材の育成を望む人々の気持ちの表れであろう。

酪農学園の創立者黒澤西蔵先生が創立した財団法人酪農育英会によって、酪農学園に学ぶ学生に対し50年を超える支援が行われてきたことは創立者の優秀な人材を育てるといふ意思が忠実に引き継がれていることの証である。

最近の5年間を見ても貸与185名、給与28名、総額1億円を超える支援活動となっている。多数の卒業生がその恩恵を受け、無事に社会に巣立ち黒澤哲学の表現者となっていることと心の底から信じつつ、創立者の育英の心が永らく伝えられ、建学の精神の普及を支える活動となることを念じたい。

## 『健土健民』思想の共有する時代

—アジアの環境問題と酪農育英会—

酪農学園大学環境システム学部  
生命環境学科長

星野 仏方



中央アジアのカザフスタン共和国とウズベキスタン共和国の国境にまたがるアラル海の消失は“20世紀最大の環境破壊”とも言われている。アラル海の消失は完全に人為的な環

境破壊によるものであることが証明された。旧ソ連では1929～33年に遊牧民の定住化を強制的に進めるとともに全面的な農業集団化が実施され、カザフスタン社会は混乱に陥った（奥田、1982）。

その後、カザフスタンはソ連の食糧基地として位置付けられ、農業生産を増大するために草原を大量に開墾した。こうしたソ連時代の社会主義体制下での「大開墾」と「自然改造計画」は、カザフスタンを含めたユーラシア大陸の広大で肥沃な土地を砂漠にした。カザフスタンとウズベキスタンの国境地帯で今も次から次へと拡大を続ける綿花畑のかんがいのため、アラル海に流れ込むアムダリヤ川とシルダリヤ川の水を大量に利用したのである。その結果、ウズベキスタンは世界第6位の綿花栽培国となった。

さらに、アムダリヤ川から取水するカラクーム運河の建設が行われた。しかし、これらのかんがい設備やカラクーム運河の建設は無計画で、不必要に取水され塩害が発生して耕地は放棄された。

このカザフスタン共和国は1991年の旧ソ連崩壊後、民主主義と自由経済の道を歩もうとしている。2010年9月、カザフスタンの名門、規模最大を誇る総合大学である「アル・ファラビカザック国立大学」から一人の留学生在が酪農学園大学に来た。

名前はマナエワ・カーリーナさん（女・23歳）、カザフ人。建築士の父が、日本人の建築家・思想家の黒川紀章の設計に憧れ、日本の文化、環境に対する意識を習わせるために、娘を日本へ留学させたいと強く思っていた。その時、私は酪農学園大学2年生の「環境ボランティア海外実習」の引率でカザフスタンを訪れていた。講演会と交流を通して、私は多くのカザフスタンの若者が、日本の戦後の復旧・復興精神と現在の「緑の国土」作りに憧れている事が分かった。その後、両大学間に「大学間学術交流協定」が結ばれ、注目の中でカーリーナさんがカザフスタン留学生として来日・来学した。



カーリーナさんの親はカザフスタンの普通のサラリーマンである。親の仕送りだけに頼って日本の高額な学費と生活費を払うことは彼女にとってとても難しかった。日本での留学生生活を途中であきらめざるを得なかった。妹も大学生で、親の負担を考え、彼女は既に帰国の準備をし、心の整理をしていることが分かった。何とかして酪農学園で勉強したいという彼女の夢を叶えてあげたいと考え、酪農育英会の原田理事長を訪ねた。

原田先生は直接英語で彼女に本学で勉強する意志を確かめられた。「あなたは本学の何が好きですか。日本の何が好きですか」と。

彼女は「酪農学園の緑があふれる、命があふれるキャンパスが大好きです。カザフスタンでは多くの農地が退化し、枯れ果ててます。私は『健土健民』という話を初めて聞いて驚き、これこそカザフスタンに必要である。ぜひ、この『健土健民』の教えを身に付けたいです。また、3月11日の東日本大震災と津波は一瞬にして多くの尊い命や生活を奪ったが、日本人はそれに負けずお互いに助けあひながら、元の生活に戻ろうとしている。暴動も起こさず、直ちに復旧・復興をはじめた。これらの現象は私にとって大切な経験であります」と答えた。

原田先生はしばらくして、カーリーナさんに「あなたは大好きな酪農学園で安心して勉強しなさい。そして『健土健民』と『三愛』の心を身に付けてください」と話された。

実は、3月11日の東日本大震災後、原発事故の影響も大きく、多くの国は自国民を帰国させた。カザフスタン大使館からも私に直接電話が入った。「カザフスタン政府は日本在住の自国民をチャーター便で帰国させている。カーリーナさんを直ちに大阪・関西空港まで帰らせて欲しい」ということであつた。私は彼女に大使館の要請を伝えた。

しかし、カーリーナさんは「私は帰国しません。ここは安全です。日本が平安な時に来日し、日本が大変なこの時期に、逃げることは私にできません」とのことだつた。その後も大使館から数回にわたって説得の電話があつたが、彼女は日本に留まり勉強を続けた。

非常時にこそ人間の本質が分かる、という説がある。カーリーナさんは酪農育英会の温かい心に感謝しながら日常生活を送っているに違いない。酪農育英会のご支援でアジアに『健土健民』を共有する時代が来ているのではないか。

## 建学の精神を 共に担うために

とわの森三愛高等学校教諭 大 中 隆



私は卒業生として、また学園人として酪農育英会の活動に対して微力ながらお手伝いさせていただいている。

昨今の世界を取り巻く情勢を見るにつけ酪農学園の理念によろやく時代が追いついてきた感がある。まさに時代が求める教育を本学園が提供していると自負するところである。今回は誌面をお借りし「建学の精神」を共に担うために、「建学の精神」を改めて見つめなおし、今後の本学園での教育活動の指針を探りたい。

キリスト教主義を掲げる本学園における重要な課題は、「建学の精神」に根ざした共同体（学生・生徒・家庭・教職員）の構築である。その共同体とは、学ぶ者・働く者が信仰の有無に関わらず「建学の精神」を共有し、共に担うために、それぞれの立場を活かして貢献しようものであると考える。

日々の教育実践は建学の精神の具現化であるべきであり、その中でそれぞれが自らの使命・召命に気づきそれを果たしていくことが、建学の精神を共に担うという共同体の目標に適うことであらう。

その実現のためには、「建学の精神」（創設者の理想・理念）を歴史的な研究に根ざしてその意味を明らかにし、それを現代的に解釈し表現していくことが大切である。

建学の精神とは「神を愛す、人を愛す、土を愛す」という「三愛精神」と「健土健民」である。

「神を愛す」とは、存在の根拠として神から与えられた命に伴う「使命」を知り、感謝の心を養うこと。「人を愛す」とは、自分と同様に命を与えられている他者を尊重し、ともに支え合い責任を果たすこと。「土を愛す」とは、土を理解することと思う。真の国土づくりを行い健土を生み出し、そこから与えられた健康な食物によって心身の健康を得、健民を育成するという考え方であり、「健土と健民の永久循環」を実学で実践することである。

建学の精神は本学園の存在意義を示しているものである。ゆえに、これを学生・生徒へと伝えていきたい。そのためには先に述べたように、信仰の有無に関係なく共同体を構成する一人一人が、建学の精神を日常の学校生活の中で体感している状態を作り出すことが必要である。それは、校風のような意味合いで、建学の精神が空気や水のように生活に不可欠なものとして満ち溢れている状態であらう。その状態を作り出すことが、建学の精神を共に担うことにつながっていくと考えるのである。



## 酪農育英会奨学金に感謝

酪農学園大学酪農学研究科  
食生産利用科学専攻 博士課程1年 阿古達木 (アグダム)

中国内蒙古自治区の赤峰市から3年半前に来日した阿古達木 (アグダム) と申します。環境学部、環境GIS研究室で金子正美先生の下、研究生を1年間、酪農学研究科修士課程にて、飼料作物学研究室で2年間勉強し、2011年3月に修了し、現在、博士課程に進学し、半年を経過したところです。

日本に来た契機は、私の実家は酪農家で、また、内モン農業大学では植物関係の勉強していたことから日本で農業技術や知識を修得し、故郷の内蒙古自治区の農業生産や砂漠化防止に寄与できる技術者になりたいと考えたことです。修士課程においては「泥炭土における荒廃草地の植生改善」をテーマに草地分野の研究に取り組みました。

本学の元野幌肉牛教育研究農場の採草地を舞台にした実規模試験でしたが、何とかデータをまとめることができ、北海道草地研究会で2度発表できたことは、貴重な経験となりました。

現在、博士課程においては作物分野のテーマに転向し、「ダイズの分枝可塑性における品種間差異と、その作物学的要因解明に関する研究」に取り組み、将来の博士の学位の取得を目指して、ダイズと格闘する日々を送っております。

修士課程2年間、博士課程1年間、酪農育英会の奨学金を受給する機会

に恵まれ、大学院の研究に集中できたことを心より感謝申し上げます。

多くの私費留学生は、母国または日本政府より公費を受給された留学生に比べて、物価の高い日本においては経済的に困難な立場におかれています。奨学金の受給がなければアルバイトに多くの時間を割く必要があり、研究時間もかなり制約されることになります。

このような状況の中、向学心が旺盛でも、大学の研究生活に100%集中することができず、言葉のハンデも加えて、能力の割りに質の低い論文にとどまってしまうケースも少

なくないと予想されます。

そんな中、私が幸いにも奨学金を受給することができ、研究に集中し、その興味を深めることができたことに対して、酪農育英会に心より感謝申し上げます。

私のように、農業技術や獣医学を学ぶために、留学を志す多くの留学生がアジア諸国にはいます。しかし、公費援助が得られず、授業料の高さから断念せざるを得ない人々が少なくないをご理解いただければ幸いです。研究活動に熱心な留学生が増加することは、海外の研究機関との交流の機会となり、日本人学生にも刺激を与え、大学を多面的に活性化させます。今後、酪農育英会の奨学金がさらに充実し、大学院の授業料の値下げなどを含めて、留学生の研究環境がより改善されますよう心よりお願い申し上げます。



## 私の研究と支援への感謝

酪農学園大学酪農学研究科  
食生産利用科学専攻 博士課程1年

マナエワ・カリーナ  
Karina Manayeva

私は大学院において星野教授らにより指導を受けています。私の研究は、中国チベット自治区における高原地域 (青海チベット) の植生、動物、気候に関連した生態を衛星データを利用して情報を得、解析することです。

とくに、この地域に生息するチルー (Tibetan antelope) を指標としてその生態系を明らかにすることによって、この地帯の将来にむけて、適切な指標を与えようとするものです。

今やチベット自治区には、鉄道や高速道路が開発され、鉱物生産や物流が盛んであるが、そのため本来の野生動物のチルーの生息地は分断され、自然の生態系は破壊されつつあります。

このことは、今や世界の環境問題であると同時にカザフスタン国の問題でもあります。

私は上記のような研究を継続完成するための機会と経済的な支援をいただけるようになったことを心より感謝しています。そして近い将来においてこの研究の成果が得られることを非常に喜んでおります。

この奨学金がいただけることによって、すべての人々に、またすべてのことに愛を与えるという理念の酪農学園大学の教育を受け続けることが出来るようになったのです。

どうぞあなた方の崇高な運動を続けて下さい。おそらく、そのことは人類のために貢献することでしょう。

貴会の有益な行為は善意であり、また開かれた心で必ずむくわれると思います。

私はこの研究の計画を作り、そして新しい結果として博士号が得られるよう努力致します。

### カザフスタン

正式国名はカザフスタン共和国で、中央アジアの国家である。中国、ロシア、キルギス、ウズベキスタン、トルクメニスタンらの諸国と国境を接し、カスピ海、アラル海に面している。

人口は1500万人で、その密度は6人/km<sup>2</sup>。公用語はカザフ語、ロシア語、首都はアスタナでソ連崩壊後の1991年に独立した。ユーラシア大陸の中心に位置し、世界第9位の広大な国土面積を有し、同時に世界最大の内陸国でもある。国土の大部分は砂漠や乾燥したステップ(植生)で占められており、1人当たりのGDPは11,415 (2008年)ドル、通貨はテンゲ (KZT)。





## 「夢」

とわの森三愛高校  
アグリクリエイイト科1年機農コース

佐藤

はやま  
駿

父親と二人できれいな牛を多く飼っている、人と触れ合うことができる観光牧場を経営することが小さい頃からの夢です。農業高校を卒業した父が畑の担当で、動物が好きな私が牛を担当したいと思っています。

酪農のよいところは、家族でできる仕事であること、適当な頭数と畑の面積があれば環境に負担をかけない農業ができることです。また、観光牧場でなら、小さい子供からお年寄りまでのたくさんの笑顔に出会えると思っています。

しかし、私は実家が酪農ではないので、一からの勉強を始め酪農家への道に一步近づくために北海道にある酪農学園大学の附属高校である「とわの森三愛高等学校」に入学を決めました。私が入学した「アグリクリエイイト科機農コース」は酪農を中心に勉強する全国各地から仲間が集まる全寮制のクラスです。

実家が酪農家の仲間もいれば、私のように酪農家ではない仲間もいます。全国各地から集まってくるために出身地域の話が飛び交い楽しい学校生活を送っています。

高校の牛舎は、ほとんどが手仕事です。牛の寝床づくりや糞や汚れた寝わらを一輪車に乗せて、堆肥場まで運ぶことも手仕事です。また飼料計算の際も、牛の健康状態や生育ステージによって種類や量が頭一頭異なるため、はかりを用いてグラム単位まで計量して給飼しています。唯一、機械を使うのは搾乳の時だけです。

「確かに、現在の酪農は機械作業が多いけれど、みんなには機械操作の“技術”を身につけるのではなく、“手作業”を通して牛を身近に感じ、牛と心を通わせる姿勢を身につけて欲しい。牛舎での作業は牛一頭一頭が主役だから、牛が食べやすい飼料のやり方、牛が寝たくなるような寝床の作り方、牛が嫌がらないミルクの掛け方、すべては牛のためにある。そのことを忘れないで。」と先生から言われ、すべての実習内容に

意味があるのだと気がつきました。今では牛が主役の毎日を意識して実習に取り組んでいます。一日の飼料の摂取量には目を配り、飼槽に食べ残しはないか、体温の計量、毛並みツヤ、糞の状態に異常はないか、毎

日毎日、牛の観察をしています。

自分が搾った牛乳が出荷され、北海道や日本の誰かが飲んでくれると思うとすごく嬉しいです。自分が搾る牛の牛乳がもっとたくさんの人に飲んでもらいたい。そう考えると毎日の実習が楽しいです。夢が広がります。これから、高校での実習や他の酪農家への実習を通して、三年間日々成長し父と観光牧場ができるように頑張ります。



## 私の決意

とわの森三愛高校  
普通科1年アドバンスコース

りの  
いえ  
ただ  
ちか  
李家忠睦

私は中学のときに、進学する高校をなかなか決められませんでした。そんな時に、酪農学園大の卒業生の叔父から、とわの森三愛高校の話聞き、HPを見たり学校説明会に来たりするうちに、だんだんこの高校に魅力を感じ始めました。

進路が決まっていなかった私にとって、一つの学校にたくさんの種類のコースがあるというのはとても魅力的に感じられました。さまざまな考えを持つ人たちの中に入れば、自分のやりたいことも見つけやすいと思いました。そして、難関大進学を目標とするアドバンスコースに入れば自分の進路を決める上でもいろいろと幅が広がり、余裕ができると思いました。これらの理由で私は、とわの森に入学することを決めました。

今、両親は茨城県の日立市に住んでいます。私が小学校6年の時までは京都の繁華街に住んでいました。私が中学校に上がるときに引っ越ししました。近々、また引っ越しします。中学3年の冬休み頃に土地を購入していた福島県の貝泊というところに引っ越しします。両親は京都で、フランス料理店を営んでいましたが、新しい夢を持って福島県で新しい仕事を始める予定です。今、茨城に住んで準備を進めているところです。

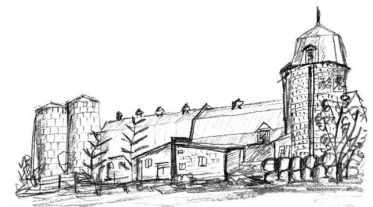
春休み、両親は茨城、私は入試も無事に終え京都に帰省中でした。3月11日、東日本大震災が起りま

した。私はニュースでこのことを知りました。茨城の父は普段なら車から家から2時間程のところでしたが、交通渋滞のために家に着くまで15時間もかかったそうです。

母は地域の公民館に避難したそうです。茨城の家の周囲は農作物の蓄えなどで、すぐに普段の生活を取り戻すことができたそうですが、ガスやガソリンには困ったとも聞きました。

また、この震災による原発事故の影響で放射線の影響が心配され、一時は福島県の貝泊への移住もあきらめないといけないかもしれないと思いました。しかし、検査も一通り終わり準備を再開しました。貝泊での両親の新しい生活が間もなく始まるので、私も楽しみです。

これから両親の仕事が本格的になります。もっともっと大変になっていくと思います。私もまだ自分の夢は定まりませんが、両親に心配をかけないよう頑張り、しっかりと自分の将来を、とわの森三愛高校で考えたいと思います。



## 2010年度の事業報告及び2011年度の事業計画

### 2010年度事業報告

1. 奨学金貸与事業:45名に対し、総額19,610,000円を貸与した。

内訳	予算		決算		差異	
	人数	(千円)	人数	(千円)	人数	(千円)
大 学	42	20,160	38	17,560	4	2,600
短期大学	1	480	0	0	1	480
高等学校	8	1,920	5	1,200	3	720
大学院	2	1,200	2	850	0	350
計	53	23,760	45	19,610	8	4,150

2. 奨学金給与事業:21名に対し、総額5,160,000円を給与した。

内訳	予算		決算		差異	
	人数	(千円)	人数	(千円)	人数	(千円)
私 費	4	1,920	2	960	2	960
留学生	3	1,800	4	2,400	△1	△600
高等学校	15	1,800	15	1,800	0	0
邦人留学生	1	480	0	0	1	480
計	23	6,000	21	5,160	2	840

3. 酪農研究奨励金交付事業：1個人に対し300,000円を交付した。

・酪農学園内の40歳未満の教職員

酪農学部食品科学科 大久保大悟 助手 300,000円

【大学生における摂食障害と自我状態の検討】

\* 尚、団体への交付は日本酪農青年研究連盟主催の日本酪農研究会が口蹄疫の感染拡大により次年度に延期されたため、交付中止となった。

### 2011年度事業計画

1. 奨学金貸与事業:52名に対し、総額22,520,000円を貸与する。

内訳	予算		予算(前年)		増減	
	人数	(千円)	人数	(千円)	人数	(千円)
大 学	40	18,560	42	20,160	△2	△1,600
短期大学	0	0	1	480	△1	△480
高等学校	9	2,160	8	1,920	1	240
大学院	3	1,800	2	1,200	1	600
計	52	22,520	53	23,760	△1	△1,240

2. 奨学金給与事業:23名に対し、総額6,000,000円を給与する。

内訳	予算		予算(前年)		増減	
	人数	(千円)	人数	(千円)	人数	(千円)
私 費	3	1,440	4	1,920	△1	△480
留学生	4	2,400	3	1,800	1	600
高等学校	15	1,800	15	1,800	0	0
邦人留学生	1	480	1	480	0	0
計	23	6,120	23	6,000	0	120

3. 酪農研究奨励金交付事業：1団体、1個人に対し総額600,000円を交付する。

・日本酪農青年研究連盟 第63回日本酪農研究会における最優秀賞(黒澤賞)の副賞(酪農育英金)として300,000円

・酪農学園内の40歳未満の教職員1名に対し 300,000円

### 事務局から

今年も残りわずかとなりました。同窓生会館内にある育英会事務局の窓からは、時折木々の間をエゾリスが駆け回り、学生たちの目を楽しませています。

今年3月11日の東日本大震災から今日に至るまで、次から次へと人災、天災が重なり、大変な年となりました。限られた予算の中で、学生、生徒のために、いささかでもお役に立ちたいと、より強く感じ、育英会が出来ることは何かということ深く考えさせられた1年でもありました。

2012年が皆様にとって希望に満ちた明るい年となりますよう心よりお祈り致します。

### (お知らせ)

☆上記予算とは別枠で、被災されたご家庭の学生・生徒に対し募集を行い、高校から3名の推薦があり、奨学生として採用決定致しました。

☆本年9月より、ゆうちょ銀行普通貯金口座から、自動振替による奨学金の返還が可能となりました。現在、奨学金を返還中の方で自動振替を希望される方は、ゆうちょ銀行で口座を開設し、以前、郵送にてお届けした「自動払込利用申込書」と通帳を持って、ゆうちょ銀行窓口で手続きをお願い致します。

「自動払込利用申込書」がお手元にない場合は事務局までご連絡をお願い致します。

☆本年10月にホームページをリニューアルしました。学園のHP「関連団体」より、閲覧可能となっています。内容についてご意見、ご希望などがございましたらお知らせ下さい。

現在、公益法人の認定を受けるため準備を進めております。

奨学金の貸与・給与事業を充実するため、今後とも皆様方のご協力をよろしくお願い致します。

酪農育英会だより  
2011年12月1日発行 2011年版  
財団法人酪農育英会  
〒069-8501 江別市文京台緑町582  
TEL 011-386-1211  
E-mail: rg-ikuei@rakuno.ac.jp  
印刷 北海道リハビリ